

雜俳における漢字使用狀況

——『冠附四季の花』の場合(三)——

西 讓 二

はじめに

本稿は本学紀要第十一号(平成六年三月)および第十二号(平成七年三月)において報告した「雜俳における漢字使用狀況——『冠附四季の花』の場合(一)——」・「雜俳における漢字使用狀況——『冠附四季の花』の場合(二)——」で、掲げ得なかつた次のものについて報告するものである。

- 一 全く振り仮名の与えられていない漢字およびその用例
- 二 振り仮名の与えられている場合の少ない漢字
- 三 漢字字種の使用度数

全く振り仮名の与えられていない漢字について、以下掲げる。掲出にあたっては、まず該当する漢字を索引での掲出順に配し、すぐ下に(一)で用例数を示し、また、用例そのものは索引での掲出法に従って用例数の下に示すこととした。これにより、どの漢字がどのような状況で振り仮名が与えられていないかということへの理解が深められるであろう。全く振り仮名の与えられていない漢字は六五字である。

壹(1) イチー 一枚^ア 25オ2

イツー 一本 11ウ2 一軒^カ 31オ6

引(8) ひく 一いて 8ウ5 ちんば 38ウ5 41ウ9 一さや 37オ4

ひきー 一ぬいて 31オ4

ひっー 一はり蛸^カ 30ウ3 一く、り 39オ5

一びき のつー 47オ9

右(1) みぎ 一22オ6

可(1) カー 一愛らしい 39オ9

晦(1) 一 一 日 33ウ3

畫(3) エ 一 20ウ8 29オ5 31オ5

千(1) 一ぼし 梅 49ウ3

吉(1) よしー ー野 29ウ1
 迄(1) まで ー43オ5
 客(1) ーキャク 居續^{キツ}ケー41オ7
 九(1) ク ーの段 43オ8
 宮(1) みやー ー本無三四 33オ
 京(5) キャウ ー3ウ5 31ウ11
 五(1) ーゴー ーみやげ 5ウ5 23オ3 ー登^ノり 41ウ10
 語(1) かりー 四ー十日程 42ウ4
 江(4) えー ー戸 18ウ3 47ウ8 48ウ6 ー戸ツ子 43ウ9
 候(2) そろ ー2オ2 2ウ10
 三(9) サー ー味 34ウ1
 ーサー 宮本無ー四 33オ
 サンー ー里 2オ1 18オ1 35ウ11 ーの糸 9オ12 ー人 17オ9 ー十何^シば 48ウ6
 みつ ーつ 10ウ10
 残(2) のころ ーらず 27ウ8 ーる 7ウ12
 似(1) なる ーたりや^ク 36オ5
 砂(1) すな ー10ウ6

朱(2)	一シユ	式	23ウ2	47ウ12
宗(1)	一シユウ	法華	12オ1	
秋(2)	あき		7ウ12	10ウ11
拾(1)	ひろふ	一テ	25オ8	
商(1)	シャウ	一賣	9ウ12	
猩(1)	シャウ	一ミ	33オ	
申(3)	まうす	一したい	24オ12	一せいでか
	まうし	一にくひ	31オ8	48ウ8
神(1)	かみ	一さん	36ウ11	
儘(1)	まま	一よ	29ウ10	
水(11)	みづ	一8ウ8	9オ11	11オ2
		一ス		21オ2
寸(1)	一スン	一	48ウ3	22オ8
姓(1)	一シャウ	百	め	49ウ1
夕(2)	ゆふ	一日	38ウ10	
		一部	27ウ6	
川(2)	かは	一竹	47オ11	
	一がは	滑り	8ウ8	
善(1)	ゼン	一は	急げ	26オ9

袋(1)	一ぶくろ	ぬか	一24オ2
代(1)	一ダイ	茶	一41ウ12
町(2)	まち	一3ウ5	10ウ3
笛(1)	一ぶえ	鹿	一7ウ12
田(1)	た	一植	23オ12
殿(1)	デン	一中	5ウ6
冬(3)	ふゆ	一5ウ2	26オ10
	ふゆ	一が	れ21ウ4
同(4)	おなじく	一2オ7	15オ11
			29ウ3
			49ウ5
男(1)	をとこ	一49オ3	
式(2)	ニ	一朱	23ウ2
			47ウ12
梅(3)	一バイ	寒 ^{カシ} 紅	一9ウ7
	むめ	一フン	く40オ7
	むめ	一干	49ウ3
迫(1)	せまる	一り	36ウ7
八(5)	ハチ	一兵衛	34オ6
			49オ5
	一ハチ	十	42オ5
	ハツ	一	百20ウ12

隣(2)	り となり	り 32オ4 46ウ6
里(3)	り	三—2オ1 18オ1 35ウ11
歟(2)	か	穴—29オ8 耻かこ—47オ10
又(7)	また また—	—かいな20ウ11
法(1)	ホツ	—華宗12オ1
兵(2)	一べ	八—衛34オ6 49オ5
部(1)		夕—27ウ6
富(1)	フ	—士6ウ2
品(2)	しな ヒン	—24ウ8 —ン39オ2
百(2)	ヒヤク	八—20ウ12
備(1)	ビン	—姓め49ウ1
破(2)	る	—後25オ10 —下1オ11 2オ5
半(1)	—ハン	ソメキ—分14ウ11
反(1)	ホ	—古30オ2
	—ハツ	七てん—とふ37ウ3

鹿(1) しかり

一笛 7ウ12

和(2)

||

日 12オ7

20ウ5

この六五字は、山田俊雄氏の「新木賊」の調査^註での字数である四三字、および拙稿の「青木賊」の調査^註での字数である二七字に比べると、かなり多くなっている。この「四季の花」と「新木賊」とで、共通して全く振り仮名の与えられていない漢字は、

吉 京 江 三 姓 半 百 兵 又 歟

である。また、「四季の花」と「青木賊」とで、共通して全く振り仮名の与えられていない漢字は、

晦 九 京 候 秋 八 百 兵 歟

である。そして、「新木賊」「青木賊」「四季の花」の三つに共通して、振り仮名の与えられていない漢字は、

京 百 兵 歟

である。ここでは、やはり、山田俊雄氏が全く仮名の与えられていない漢字について指摘された五つの性質^註を考えると、**「青木賊」**のときと同様に、この**「四季の花」**においても、それをあてはめて考えることができるであろう。

なお、この全く振り仮名の与えられていない漢字が、「四季の花」では六三字と多くなっている点については、調査対象としての「四季の花」という文献のもつ分量が、「新木賊」や「青木賊」に比べて少ないということを理由としてあげることができると考えられる。

二

全く振り仮名の与えられていない漢字を考える場合に考慮しなくてはならないものとして、「青木賊」のときと同様に、振り仮名の与えられている場合が少ない漢字を以下に取り上げる。【青木賊】での報告と同様に、用例のうち半数以上に振り仮名の与えられていない漢字について取り上げることとする。掲出にあたっては、該当する漢字を索引順に配し、その漢字の全用例中に占める振り仮名の与えられていない場合の用例数を分数で示す。

一	$\frac{18}{22}$	雲	$\frac{2}{3}$	衛	$\frac{2}{3}$	外	$\frac{3}{5}$	月	$\frac{4}{5}$	丸	$\frac{4}{5}$	儀	$\frac{3}{6}$	供	$\frac{2}{3}$	橋	$\frac{3}{6}$	近	$\frac{2}{3}$
見	$\frac{22}{27}$	戸	$\frac{8}{10}$	古	$\frac{3}{5}$	山	$\frac{3}{5}$	此	$\frac{12}{19}$	糸	$\frac{3}{5}$	事	$\frac{7}{11}$	七	$\frac{2}{3}$	日	$\frac{8}{13}$	酒	$\frac{2}{3}$
十	$\frac{7}{8}$	出	$\frac{19}{38}$	春	$\frac{2}{3}$	如	$\frac{2}{4}$	升	$\frac{3}{4}$	松	$\frac{2}{3}$	上	$\frac{7}{13}$	心	$\frac{3}{5}$	井	$\frac{2}{3}$	世	$\frac{4}{7}$
石	$\frac{3}{4}$	雪	$\frac{3}{5}$	大	$\frac{5}{7}$	茶	$\frac{4}{7}$	中	$\frac{7}{12}$	店	$\frac{2}{3}$	斗	$\frac{2}{4}$	度	$\frac{3}{4}$	嶋	$\frac{2}{3}$	二	$\frac{9}{10}$
年	$\frac{2}{4}$	萬	$\frac{2}{4}$	風	$\frac{5}{8}$	分	$\frac{5}{6}$	米	$\frac{3}{4}$	本	$\frac{2}{4}$	目	$\frac{3}{6}$	油	$\frac{5}{8}$	有	$\frac{8}{13}$	柳	$\frac{3}{5}$

また、使用度数が二回で、その一方が振り仮名の与えられていない場合であるという漢字は、次に示す三三字である。

華廻皆菊穴向光士車受重恠醬鐘津眞盛扇船膳段智竹虫晝丁
内比不夫餅弥命

右に掲げた中で、使用度数が二回でその中の一例が振り仮名の与えられていない漢字の場合と使用度数が三回でその中の二例が振り仮名の与えられていない漢字の場合とを使用度数が少ないものとして除けば、振り仮名の与えられている場合が一例のみというものは、次の九字である。

月 丸 十 升 石 度 二 分 米

また、振り仮名の与えられている場合が二例のみというものは、使用度数が四回でその中の二例が振り仮名の与えられていない漢字の場合をやはり使用度数が少ないとの理由で除くと、次の九字である。

外 戸 古 山 糸 心 雪 大 柳

次にこの「月」以下「柳」までの二一字について、その使用状況を略述する。

「月」は字音の「一クワツ」「一ゲツ」と字訓の「つき」のうち、振り仮名が与えられているのは「日月」(19オ)のみである。

「丸」は字音の用例がなく、字訓の「まるめる」「まるこい」「まるー」「まるで」のうち、振り仮名が与えられているのは「利リが有ツて」一座は下の座が丸マルめメ（13オ10）のみである。

「十」は字訓の例がなく、字音の「ジフー」「ージフー」のうち、振り仮名が与えられているのは「十萬堂ジュウマンヤウ」（10ウ12）のみである。

「升」は字音の例がなく、字訓の「ます」のうち、振り仮名が与えられているのは「居升キマシので」（16オ8）のみである。他は「御座り升」（37オ10）「聞イテ升」（48ウ8）「お升のけ」（48オ2）である。

「石」で、振り仮名が与えられているのは塾字訓の「菊石キクシ」（43オ6）のみで、他は字訓の「いし」（18ウ10 29オ6）「いしー」（22オ3）の例である。

「度」は、字音「ード」、字訓「ーたい」のうち、振り仮名が与えられているのは「今度コノタビは」（35オ12）である。もう一つある字音の例はやはり「今度」（30オ10）であるが、こちらには振り仮名は与えられていない。

「二」は字音の「ニ」「ニー」「ーニ」「ーニ」と字訓の「ふたー」のうち、振り仮名の与えられているのは「二ニタタ」（36ウ4）のみである。字訓にあと一例「二ニタタ人ト」（43オ8）があるが、こちらには振り仮名は与えられていない。

「分」は字訓の用例がなく、字音の「フンー」「ーフン」のうち、振り仮名が与えられているのは「分ブン別ベツ」（30ウ6）のみである。他は「十分」（3オ11 12ウ3 20オ7 24オ11）と「ソメキ半分」（14ウ11）である。

「米」は字音の用例がなく、字訓の「こめ」「こめー」のうち、振り仮名が与えられているのは「米コメ」（44ウ）の例で、他に「こめ」で二例（5ウ4 47ウ10）あるものには振り仮名は与えられていない。

「外」は字音の用例がなく、字訓の「そと」「ほか」のうち、振り仮名が与えられているのは（18ウ7 39ウ12）の「ほか」の二例である。

「戸」は字音の用例がなく、字訓の「と」「ど」「ど」のうち、振り仮名が与えられているのは、「戸」(33ウ10)「井戸」(16ウ4)の二例である。「と」には他に(6ウ7 25オ2)の二例が、また、「あど」には他に(39ウ10 43オ3)の二例が、それぞれあるが、振り仮名は与えられていない。

「古」は字音の「コ」「ゴ」と字訓の「ふる」「ふるい」のうち、「古今」(7オ2)と「古池」(22ウ4)の二例が振り仮名の与えられている例である。

「山」は字音の用例がなく、字訓の「やま」「やま」「やま」のうち、「山ざくら」(2ウ4)「沢山」(44ウ)の二例が振り仮名の与えられている例である。

「糸」は字音の用例がなく、字訓の「いと」「いと」のうち、振り仮名の与えられているのは「糸屑」(16オ2)「白糸」(22オ2)である。

「心」は字音の「シン」「シン」「シン」「ジン」と字訓の「こころ」「こころ」のうち、振り仮名の与えられているのは「心腹」(30オ4)「心地」(23オ1)である。

「雪」は字音の「セツ」と字訓の「ゆき」のうち、振り仮名の与えられているのは「雪隠」(1ウ7)「雪」(42ウ10)である。「ゆき」は他に三例(17ウ2 21ウ6 38オ10)があるが、いずれも振り仮名は与えられていない。

「大」は字音の「ダイ」「ダイ」と字訓の「おほい」のうち、振り仮名が与えられているのは字訓の方の「大舞臺」(9ウ5)「大平」(33オ)の二例である。

「柳」は字音の用例はなく、字訓の「やなぎ」「やなぎ」のうち、「柳」(16ウ12 39ウ12)の二例に振り仮名が与えられている。「やなぎ」には他に二例(5ウ2 19ウ10)があるが振り仮名は与えられていない。

以上の一八字のうち「丸」「米」は、山田俊雄氏が「新木賊」について示された全く振り仮名の与えられていない漢

字四三字の中に見ることができ。一方、『青木賦』と比べてみると、ここに示した漢字は、全く振り仮名の与えられていない漢字二七字と共通するものがなく、振り仮名の与えられている場合の少ない漢字で特に取り挙げたものとも共通しない。これらは対象とした資料の内容上の差異および量的な問題によるものと考えられる。しかしながら、全く振り仮名の与えられていない漢字や、振り仮名の与えられている場合の少ない漢字として分数で用例数の割合を示した漢字においては、共通して登場するものがあることはやはり否定できない。『四季の花』の全体の分量が少ないことも考慮に入れると、この振り仮名を与えずに行われる傾向のあつた漢字群を、資料の分量による影響をあまり受けずに、多くの資料についての調査の積み重ねによつて、次第に明確にすることができると考えられる。

三

『冠附四季の花』で用いられている漢字八四八字のうち、使用度数が三回以上のものについて、その用法をもあわせて次に示す。掲出方法は、山田俊雄氏の『新木賦』での調査※に従うものとする。すなわち、縦に、順位、使用度数、該当漢字、字音の例（片仮名で示す）、字訓の例（平仮名で示す）、塾字訓の例（表記とよみを示す）の順に配する。同一使用度数のものには索引での掲出順とする。字音、字訓はいわゆる字音仮名遣い、古典仮名遣いによるものとする。該当するものない箇所は○印で示す。

順位	字音	字訓	塾字訓
1	出 シュツ	いづ だす だし てる で	○
2	来 ライ	くくる	○
3	見 〇	みえる みせる みる	○
5	御 ゴ	て(で)	○
6	一 イチ	お	○
7	何 〇	ひとつ	御—人おひとり
9	入 ニフ	なに なん	—処どこ —所どこ —處どこ —時いつ
10	此 〇	いる いるい 入れる いれ	○
11	居 キヨ	かた(がた) ち	○
13	子 シ(ジ)	この	○
14	無 ム	すわる すわり すゑ ゐる ゐ	敷—しき
15	下 カ	こ(こ)	銀—かね 銀—宮かねばこ 銀—持かねもち
13	仕 〇	なし	○
13	日 ジツ	おりる おろす くだす さがる し	○
13	ニチ	た	○
		する し	○
		ひ	○
			—和ひより 晦—みそか

(70)

6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
分	舞	土	通	置	知	替	前	是	丈	小	書	今	香	銀	橋
フ	ブ	ド	ツ	○	○	○	ゼ	○	ヂ	○	ジョ	キン	カウ	ギン	○
ン			ウ				ゼ		ャ			コン			ギ
(ン		ウ						○
フ															
ン)															

○	ま	つ	と	お	し	か	ま	こ	だ	こ	か	い	か	○	は	○	ま
	ふ	ち	ほ	く	る	は	へ	れ	け	ち	き	ま	(し		な
	も		す		し	り		い		い	か		が		(こ
			ど		れ	か		さ		さ	か				ば		め
			ほ		る	は		い		い	く				し		
			し			る		い		い					し		
			と			か		い		い					し		
			ほ			は		い		い					し		
					か		い		い					し			
			ほ			か		い		い					し		
			り			へ		い		い					し		
			と			か		い		い					し		
			ほ			よ		い		い					し		
			る					い		い					し		

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		産												子			
		み												か			
		や												ね			
		け												ば			
														こ			
														子			
														持			
														か			
														ね			
														も			
														ち			

(120)

(110)

5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	
能	當	湯	朝	長	棹	先	雪	折	性	吹	身	心	植	耳	糸	四	山
○	タウ	○	○	チャウ	○	○	セツ	○	シャウ	○	シン	シン	○	○	○	シ	○

よ	あ	ゆ	あ	な	さ	さ	ゆ	を	○	ふ	み	こ	う	み	い	○	や
い	た		さ	が	を	ま	き	り		く		こ	わ	み	と		ま
よう	り		さ	い	(さ)	ま		を		(ぶ)		こ	る				
	あ				を	ず		る				こ	あ				
	て											こ	る				
	る											あ					
												あ					
												る					

○ ○ ○ 今—けさ | 閑のどか ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

(140)									132	(130)								
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5
紅	合	江	後	結	極	汲	閑	解	安	路	柳	味	放	文	八	賣	馬	
コウ	○	○	ゴ	ケツ	コク (ゴク)	○	カン	○	アン	ロ	○	ミ	○	モン	ハチ ハツ	バイ	バ マ	
べに	あひ あふ	え	のち	むすぶ ゆふ	きまる	くむ	○	とけ とける	やすい	ち	やなぎ	あぢ うまい	はなす はなれる	ふみ	○	うり うる	むま	

—粉べに	○	○	○	○	○	○	○	長—のどか	放—ほとけやせぬ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
													—解ほとけやせぬ						

(170)

(160)

4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	
焚	腹	付	鼻	萬	薄	納	年	同	燈	等	迹	灯	度	渡	斗	堤	釘
○	ブク	○	○	バン	○	○	ネン	○	トウ	○	○	チン	ド	○	○	チャウ	○
				マン					(ドウ)			トウ					
									ド								
たき	はら	つく	はな	よろづ	うす	おさまり	とし	おなじく	○	ら	にげ	ひ	たい	わたし	ばかり	さげる	くぎ
たく		つける			うすい	おさめる					にげる						

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 今—ことし ○ ○ ○ ○ ○ ○ 鳥—ちよっと ○ ○ ○

(230)

3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	
春	汁	酒	這	七	時	斯	枝	止	散	産	最	西	黒	廣	高	孝	公
○	○	○	○	シチ	○	○	○	○	○	○	サイ	スイ	○	○	カウ	カウ	コウ

(220)

はる	しる	さか	はひ	なな	とき	かう	えだ	とまる	ちり	うむ	も	にし	くろ	ひろ	たかい	○	○
		さけ	はひり		(どき)			とめる	ちる		もう		くろい	ひろい			
														ひろげる			

○	○	○	—入はひる	○	何—いっ	○	○	○	○	土産みやげ	○	○	○	○	○	○	○
---	---	---	-------	---	------	---	---	---	---	-------	---	---	---	---	---	---	---

(280)

(270)

3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3 3
込 六 連 麗 礼 流 裏 里 樂 用 末 广 瓶 敷 附 鼻 番

○ ロク レン ライ レイ リウ ○ リ ラク ヨウ マツ マ ビン ○ ○ ○ パン
レイ

こむ ○ つれ ○ ○ ながれ うら ○ たのしみ ○ すゑ ○ ○ しき つく かか ○
つける かあ

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 達—だるま ○ |居しき ○ ○ ○

使用度数が三回以上のものは右ですべてであるが、これは使用字種全体八四八字のうちの二八四字である。これは「新木賊」「青木賊」での五回以上のものに比しても少ない状況であるが、これも、資料全体の分量による使用度数が低くなっていることによると考えられる。

また、使用度数が二回以下のものについて略述すると、二回のもは「暗」など一七三字、一回のもは「埃」など三九一字である。

なお、全体の分量が少ない資料を対象として調査を行った場合でも、「青木賊」などと比較にならないというのではなく、十分に積み重ねの中の一つの資料として用いることができるといえよう。

注

- 1 山田俊雄氏「近世常用の漢字——雑排「新木賊」の用字について——」（『成城文藝』第一〇五号、昭和五八年二月）
- 2 「雑排における漢字使用状況——「青木賊」の場合（二）——」（『信州豊南女子短期大学紀要』第八号、平成三年三月）
- 3 注1に同じ。
- 4 注1に同じ。